

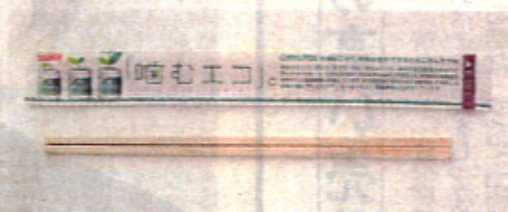
●環境マーケティング



ヒノキを使った割りばしから、スギ材のオフィス家具や合板まで……。安価な輸入材に押されて需要が減る一方だった国産材が、復権の兆しを見せている。

国産材が復権の兆し

国産材の不振がいわれて久しい。日本は国土の七割弱を森林が占めるが、木材の自給率は一九五五年の九四・五%から二〇〇二年には一八・二%まで凋落（ちようらく）した。戦後の復興期に木材がひっ迫し、外材を輸入するようになった。戦後に植林したスギが木材として価値を持つには四十一〜五十年かかる。その間に木材の需要を外材に頼る構図が出来上がってしまった。



国産ヒノキを使用したナチュラルロソンの割りばし（写真上）と、内田洋行の国産スギ使用オフィス家具



出ない森林を手入れする意欲を失い、日本の林業は衰退の道をたどってきた。ただここに来て、東南アジアにおける南洋材の輸出規制や世界的な木材需要の拡大で、外材の価格が高騰。国産材の価格競争力が高まった。

温暖化ガス削減に貢献

年十一月末から、年間七百万膳を消費する割りばしを奈良県吉野地域の森林の整備に寄付して加工・生産したものに切り替えた。

国産スギを使ったオフィス家具の生産に乗り出したのが内田洋行だ。棚やテーブルなどの商品をそろえているが、客先の近隣地で生産されたスギを使った受注生産にも応じているのがユニークな点である。

果たしつある。木材をかつらむきする合板生産用の機械を改良。年輪の部分が硬く扱いにくい国産スギを加工しやすいに。合板用木材の自給率は二〇〇七年に三〇%を超え、昨年は五〇%前後に回復したとみられる。

日本は京都議定書で温暖化ガスを九〇年比で六%削減すると約束し、そのうちの三八%を森林で賄うとした。そのためには人工林の整備が欠かせない。外材を国産材に切り替えれば、海外からの輸送に伴う温暖化ガスも削減できる。その点でも国産材の需要の回復は朗報である。

にしていたが、生産は中国に委託していた。そこで森林を手入れする際に発生するヒノキの間伐材を使用することも、吉野地域のはし職人の力を借りることで林業の再生に貢献する考えだ。

この割りばしにはもう一つの特徴がある。最初に出荷した百万膳に、はし袋にロッテの粒ガム「キシリトールネオ」の広告を掲載している。

一方、住宅などで使われる合板用木材は国産材が復権を待たない。日本の林業は膨大な補助金で維持しているのが実情。手放しに喜ばず、多くの企業が国産材の需要を見つけて、支えていく姿勢が不可欠だ。